獄に火柱を！

日大全共闘圣消藤沢新入生

四、二八沖縄闘争に結集した日大全共闘の全ての学友諸君、とりわけ新入生の諸君に、圣消藤沢新入生より限りない連帯と友情の意を表明し、永続的日大闘争を担う戦線強化のため連帯と団結を呼びかけたい。

日大アウシュビッツと呼ばれる強権支配体制は、既に我々藤沢の学友の前にもその醜い姿の一端を表わしてきている。四月二十二日、藤沢にサークル非券に来た約十サークルは、当局が招集する券券のための会合がすんでいない事を理由に一方的に券券を禁止させられた。藤沢事ム室に連絡し、許可を取っていた釣和会でさえ「本部が許可してないし、本部に聞く様に言ったはずだ」との居直りによって同様の処置をうけた。又、二十四日朝、〝全共闘＝暴力学生の名のもとに居直りを続ける一方、高額の授業料、寄付金をとりたてながらアレハブ校舎に我々をとじこめる当局の営利主義を告発し、討論を呼びかける〟といった内容の学内ビラ入れを実行した我々に対しても醜悪な恫かつを加えてきた。木造校舎の裏側の宿直室に一ぴきのシェパード犬と共に飼われている古田の〝番犬〟――右翼関東軍は、クラスにビラ入れ中の新入生に対し、「今日は、お前らとけんかしたくないから帰れ、こんなビラまいたところですぐ回収して燃してしまうからな」とおどしを加え、強権支配の実態をバクロした。さらには、六合駅でのビラまきを行っていた我々に対しても権力のスパイたちは、終始みはりを続け、チェックして行った。

こうした「異常」な学生支配を続ける一方では、アレハブと汚ない木造校舎、気のぬけた講義によって学友をアパシーへと落しこめ、「正常化」への道をひた走るのが日大なのである。だがしかし、「異常」な「正常化」に対決し、学内秩序の「正常」を「異常」に、「異常」の「正常化」に変えて行く闘いの戦列は一歩一歩その巨大な歩みを進めている事を確認できる。今、我々は「六八年までもう一度」と夢想する事は出来ない。しかし、より一層強い意志と組織的団結に貫ぬかれた日大全共闘の隊列は、不断に学内に、地域に現われ、闘いの組織化に全力を注いでいる。

古田よ！お前とお前の背後にかかえた権力者たちへの怒りは、マグマの様に熱く煮えたぎり噴出する場を求めて地響きをたてている。三・一一中村君虐殺弾劾全共闘葬に結集した数千の日大生、四・一三闘争に決起した闘う日大生は、一様に中村君虐殺に対する怒りをあらわにし、お前らを追いつめ打倒するまで闘う事を確認した。我々は、弾圧が強化されればされるほど、我々の内なる刃をとぎすまし、更に鍛えぬかれた戦士として成長して行くであろう。強権支配と遠隔地への新入生の分断、アレハブと気のぬけた講義によってアパシー化しようと策動しても、既に闘う新入生は続々と結集し、学内に闘いの火柱を打ちたてんと活動を開始している。

全ての新入生諸君、藤沢での非妥協的闘いを開始した我々は、全ての闘う新入生諸君に、不断に学内に登場し、クラス、サークルから闘いを組織することを呼びかける。日本帝国主義の国家・基地再編と人民の生活への強制に抗する沖縄人民との連帯とは、文字通り我々がそれと同様の闘いを我々の生活する場から創出することであり、それは、一夜のスケジュール的オルグによって保障されるものではない。帝国主義大学体制解体にむけて不断に闘うことありとあらゆる反帝学生に連帯し、共に闘いぬくことこそ、沖縄人民との連帯の証しなのである。四・二八を闘うことによってはじめて沖縄人民と連帯したなどと安易に語ることはできない。

四、二八闘争に結集した全ての新入生は、ふたたび学内に登場し、五月、六月、そして七〇年代にむけて、底辺からの闘いに決起して行こうではないか。

●新入生諸君、日大全共闘の旗の下に結集し、各学部新入生闘争委員会を組織しよう！

●新入生、移植生連帯　サークル・ゼミ強化、経済学部総会に結集しよう！

一九七〇年五月二日

連絡先
日大全共闘事ム局――経済大学現代経済学生委員会
（大学院三部）